

● 座談会 ●

## 障害学生支援について

### 〔座談会の実施方法〕

東京大学に在籍する三名の障害学生と一名の支援学生および東京大学バリアフリー支援室の支援コーディネーター中津氏を迎え、懇談した。それぞれの学生と中津氏および司会者との三名の構成で四回実施した。後輩へのアドバイスやこれからの障害者支援等についてお話を伺った。

### 〔参加者のプロフィール〕

**Aさん**…工学系研究科、修士課程二年生。社会基盤学専攻。車椅子を使用。自動車で通学している。普通高校から他大  
学に、その後、東京大学大学院に進学。

**Bさん**…総合文化研究科、修士一年生。社会学専攻。障害学等も学んでいる。弱視。拡大文字（一八ポイント以上）使用。夜は白杖使用。普通高校（中高一貫）から東京大学（学部）に進学。

**Cさん**…教養学部文科Ⅲ類二年生。

軽度の難聴（高い音域が聞き取りにくい）、日常生活には特に不自由はない。普通高校から進学。

**Dさん**…支援学生。法学部四年生。

アルバイトで、法科大学院のノートテイクと講議後の文字起こし作業、視覚障害学生のための情報保障を担当。支援活動は、月に五〇時間程度。支援を始めたきっかけは、ノートテイク募集のポスターを見て。

**中津真美氏**…支援コーディネーター。

東京大学バリアフリー支援室（本郷支所）所属。専門は聴覚障害支援。

東京大学バリアフリー支援室…東京大学全体のバリアフリー化を進めるための中心的な組織。

平成一四年一〇月にバリアフリー準備室を開設し、障害をもった学生への支援を開始。一六年四月からはバリアフリー支援室として教職員へも支援を広げ、一八年四月からは本郷支所が開設され、駒場支所と本郷支所の二支所体制となった。

**司会**…独立行政法人日本学生支援機構特別支援課課長補佐 小越真一郎



## ■Aさんとの座談会

「同じ社会で一緒に暮らしていく人間としての認識を」

司会…では、まずAさんは、高校や大学でどんな支援を受けていたのですか。

Aさん…高校では、座学は普通に受け、体育は見学したり、できる競技は参加したりしていました。校舎も寮もある程度バリアフリーに配慮したものでしたが、校舎ではエレベーターがなかったもので、階段などでは、友達に担いでもらったりしていました。

大学は、私学に通っていました。校舎も新しくなったため、大体バリアフリーで、学生が行く所はほとんど一人で行了きました。ただ、支援専門の部署はなく、事務室に支援をお願いしても、「そこはあなたが頑張れば」と言われる時もあったので、そういう点ではソフト面の不備というか、不足を感じました。

バリアフリー支援室に支援をお願いしたのは、東大に進学後の住居探しで困ってご相談したのが最初だったと思います。その後、日常的に利用することになる校舎などについて設備を整えて頂いたりということを入学前にして頂きました。入学後は、図書館が使いにくいなど、問題があるたびに連絡して、対応して頂いているという形です。

あと、研究科に所属しているのが男子学生が多いので、移動で困った時は担いでもらうというか、そういう感じの生活ですね。

## 【支援室があって良かったことなど】

司会…大学院に進学してバリアフリー支援室があったという点で、メリットや効果を感じることはありますか。

Aさん…何かあったらまず相談する場所があって、そこから各部署に働きかけて頂けるということが、一番のメリットだと思います。

あと、つい最近、他学部の建物に行ったときに車椅子でアクセスできる経路が分からなかったもので、中津さんに電話して助けてもらいました。施設さえ整えて頂ければ、基本的に自分一人で動けるのですが、何かあった時に頼れる場所が常にあるっていう安心感がすごくいいと思います。

中津さん…支援室の立場で言うと、窓口が一本化されたということですね。その事により各学部毎に蓄積していた支援の経験を集約することにもつながりました。職員も、恐らく先生も、「障害のある学生が来ちゃった、どうしよう」って最初はすごく構えてしまう。そういう時に「バリアフリー支援室に相談すれば、専門の人がいろいろ教えてもらえる」という安心感があるのもメリットだと思います。

その他にも先ほど話があったような施設等が使いにくい時も、もし支援室がなかったら学生が一人で交渉しなければいけなかったかもしれない。もちろん自分で交渉する力をつけていくことも必要なだけども、学生個人の力では限界がある。その様な時には、そこは支援室が調整する役割を果たし、学生は、学業に専念できるようにしました。

Aさん…障害は様々なので、視覚障害者のための点字プロックは、車椅子ユーザーにとって邪魔だったりするなど、利害が対立することもあります。違う障害の立場でも見てくださる方がいるのは、誰にとっても使いやすい施設を作るという点で良いのではないかと思います。

司会…バリアフリー支援室の課題について、何か取り組んでいらっしゃることはありますか。

中津さん…今、支援に関する具体内容を明確化したガイドラインを作成しているところです。それがあれば、支援をする側にとっても、受ける側にとっても分かりやすくなるのではと思っています。

司会…では、Aさんから支援室へ具体的な希望などはありますか。

Aさん…あったら良かったと思うのは、入学する以前からの支援ですね。お願いしたら支援して頂けたとは思うので

すが、存在を知らなかったんです。例えば大学のホームページで、見つけやすいところに支援室の情報を載せたり、キャンパスツアー等で周知してくれば良いと思います。

私自身、情報がない中で、イメージだけで学部は私立大学を選んじやったんです。国立大学は建物も古いので車椅子ユーザーにはちょっと無理じゃないかと思って。そういう、校舎が新しいかどうかなんて観点で大学を選ぶというのは、本来ちょっと残念なことですよ。

「大学をどこにしようか」と考える段階で、「ここに来て大丈夫だよ」という情報がもうちょっとあるといいんじゃないかと思えますね。

## 【後輩へのアドバイスなど】

司会…では次に、大学、大学院への入学を考えている障害のある学生へのアドバイスがありましたらお願いします。

Aさん…本人が、「この分野も、あの分野も面白そう」という感覚で進学した場合、学生のうちは良くても、就職するとなると、入りやすい業界とかなり難しい業界があります。「大学を出たあと、自分はどうするんだろう」ということも考えて学ぶ分野を決めていくという視点を、障害のある学生はもっと持つべきかなと思います。

私自身、もうちょっと現実的に考えて学ぶ分野を検討し

の方が良かったんじゃないか、という反省はあります。今、ちょっと就職に苦労しているのです。

**司会**…障害のある学生が大学進学を断念してしまう要因について、何かご意見はありますか。

**Aさん**…多分、大学に進まない理由は、もっと前の段階で原因があると思います。中学生の時に、入院して病院附属の養護学校に通ったことがあり、そこで感じたことですが、治療や肢体訓練に時間が取られて勉強ができないという問題がありますし、障害があるだけで大変だからって、勉強に関しては、周りも甘いんですね。

そして、障害児自身もそれに甘えてしまっている。甘えたまま、小・中学校と進んでいくと、知的に障害はないのに学力はあまり高くないというところも起きてしまうと思います。中学校で学力がないと高校でもあまり身に付かない、そうすると大学へ行くほどの学力がないという、障害以前の問題になりますから。

そういう点で、普通の学校の勉強が理解できる子供だったらなるべく普通の学校に行った方がいいと思うし、行けないなら、周りが普通の学校の状況を教えてあげて、ちょっと厳しくすることが必要になってくるんじゃないかと思えます。

**司会**…では、次に高校と大学との情報共有などの連携につ

いて、何かご意見ありますか。

**中津さん**…障害のある高校生に「大学の支援はこういうものだよ」という情報を流すのはほとんどんして行くべきだと思っています。

一方で大学側と高校の連携については、私の意見ですが、これも、大学での学生の状況は、面談と本人の報告によりコーディネーターが概要を把握できるので、高校での情報は必ずしも必要ではないと思います。

**Aさん**…特定の大学ではなくて、その前段階で障害のある学生が大学に進学することについての相談窓口があると、障害のある学生が大学に進むことを、もっと現実的に考えられるのではないかと思います。

**司会**…大学からの情報発信をもっと整理していけば、受験する側にとってもっと良くなるということですか。

**Aさん**…そうですね。あと、情報が一カ所にまとまっていることも大切ですね。各大学に、自分でいちいち聞いて行くのは大変労力が要りますし、障害によっては難しい人もいるでしょうから。

#### 【これからの障害者支援】

**司会**…最後のテーマですが、これからの障害者支援についてのご意見をお聞かせください。

**Aさん**…正直、中学・高校・大学と、対応がどんどん良くなってきているので、割と今は楽で、満足しています。しかし、経験上義務教育には、まだまだ問題が多いのではないかと思います。

実は小学校一年生までアメリカにいました。アメリカでは当たり前のように普通の学校に通っていました。それが日本に帰国したら、いきなり養護学校に入れられたので、ものすごい衝撃でした。

**司会**…アメリカの場合、ADA法という法律で一般の学生同様の授業を受ける権利が保障されていますね。

**Aさん**…本人の行きたい学校に入れるようにちゃんと体制が整えられていましたね。例えばスクールバスが、一人のためだけに動くんですよ。それが義務づけられている。肢体訓練が必要だったので、その場所も学校の中に作ってもらいました。そうやって普通の子達と一緒に勉強をしていたので、日本に帰ってから衝撃でしたね。

**司会**…そういう意味では、日本の障害学生支援については、まだまだという印象がありますか。

**Aさん**…そうですね、いろいろな所に旅行へ行くと、ハード面や交通機関とかは、アメリカや北欧と比べても、結構日本は進んでいるんですよ。けれど、周囲の人達の対応やソフト面がすごく不便と感じさせるといふことです。

だから、障害者も健常者も分け隔てなく一緒に暮らしていく存在なんだという認識がもっと浸透してくれればと思いますね。帰国して一番ショックだったのは、子供達がすごく異質なものを見る目で凝視してくることでした。それは、アメリカでは全くなかったことなので。最近では、そういうことはだいぶ減りましたが、もっと社会の中で障害者が当たり前前の存在として認識されるようになればいいなと思います。

**中津さん**…支援室が障害のない学生に望むことについては「障害のある学生がいる、何ができるかな」と思ったら、直接本人に聞くようにしてもらえれば、ということですか。

#### ■Bさんとの座談会

〈気楽に大学に入学して、いろいろ試してみればいいのでは？〉

**司会**…はじめに、中学・高校で受けていた支援についてお伺いします。

**Bさん**…中学校に入った時に、学年会の先生方全員とグループ面接をしました。その時は親も同席して「目が悪いので、こういうところを注意してください」ということを先生方

にお話ししました。

授業の時は一番前の真ん中に座っていたので、板書などで困ったことは特にありませんでした。試験の時にも拡大コピーが出てきましたが、これは十分なものではありませんでした。

僕の学校ではそういう授業保障は教務課の先生がやっていました。中高一貫校で教員室は一つでしたし、部署もそんなに分かれてないので、教務課の先生がテストをこうやってくださいと言えば、担当の先生を動かせる程度の規模だったと思います。

他は、美術も体育も、もう惨たんたる結果だったんですが、とりあえずみんなと一緒にやっていましたし、赤点を付けられなかったというのが、実は一番の配慮事項だったんじゃないかと思います(笑)。

**司会**…大学受験の際にセンター試験の特別な措置は、希望されましたか。

**Bさん**…拡大文字、別室、時間延長を希望しました。高校三年の頃に弱視という診断をされて、そのあと特別措置受験があると知って、手続きを行ったという順番になります。**司会**…他に大学で支援をお願いしていることはありますか。**Bさん**…ええ。大学では本をたくさん読まないといけないわけです。僕は中・高時代は、最小限の本しか読んでいま

ませんでしたので、大学の授業に対応するためには、何かしら支援してもらうことが必要だろうと思いました。

例えば、図書館に拡大読書器を置いてもらいましたし、試験は拡大文字で別室、時間延長。拡大文字も、単なる拡大コピーではなくて、「こういう書体のこういう文字で」とお願いしたり、それを含めて授業全般についてのお願いのを支援室ないしは教務課から、先生方に出してもらうようにしています。

その他は、掲示板の情報も重要ですから、教務課でなるべく僕の見やすい形で閲覧させてもらうようにしています。

今はこうやってある程度整理できるのですが、いろいろ試行錯誤がありました。例えば一時期、全部のプリントを電子データ化してもらいましたが、これは労力がかかる割に、授業で使わないプリントが多かったので、必要最小限に。英語の必修科目だけ電子データ化してもらうとかです。他にも、支援をしてもらったのだけでも、無駄にしまったこともあります。

#### 【支援室があって良かったことなど】

**司会**…大学にバリアフリー支援室があることについて、メリットや効果を感じることはありますか。

**Bさん**…先ほど申し上げたように、高校では部署が分かれ

ていないので、一人か二人の先生だけで障害学生支援が動かせてしまうんです。大学は部署が細かく分かれていますから、こうして統一的に対応してもらえる組織があることは非常に心強いなと思いました。

**中津さん**…学内の周知がまだまだという意見はありますけれども、バリアフリー支援室ができて「ここに行けば障害について何でも教えてくれる」ということが、職員には浸透してきたと思っています。そのことで、支援する際にも説明することが少しずつ減っていった、スムーズに行えるようになってきたと実感しています。

**Bさん**…一般の学生の中での認知度はどれぐらいかと言ったら、あまり割合は高くないかもしれません。でも、各部署の、例えば教務課の職員の方などが、障害学生支援、あるいはバリアフリー支援室について知っているという意味での認知度は、高くなってきたんじゃないかと思います。

実際、僕が教養学部前期課程の時は、教務課の人の話し合いでは支援室との関わりが感じられなかったし、個人的な話し合いでは、らちが明かない部分もありました。それが後期課程に入ってから、支援室と教務課と自分を含めた三者面談が持たれるようになって、それから教務課の職員の方にも、こういう資料を見せてほしいとか、そういうことを頼みやすくなったという面もあります。

ですから、そういう意味では浸透してきたと言えるんじゃないかなと。特に職員の間では認知度は高まってきているんじゃないかと思います。

**司会**…バリアフリー支援室の課題について、何か取り組んでいらっしゃることはありますか。

**中津さん**…支援に対する具体内容を明確にしたものがないということですね。

**Bさん**…ガイドラインは、今作成中ですよね。メニューができていますよね。

**中津さん**…それがあれば、支援する側にとっても、受ける側にとっても分かりやすくて良いのではないかと思えます。

**Bさん**…僕は、理念を持った統一的な全学組織がこの大学にあること、それ自体は非常に心強いことだと思っていて、全体的に満足しているのですが、組織の形を取っている、実はこの支援の質というのは、支援室員の方々個々人の障害に対する態度・認識の仕方などに大きく左右される部分はまだだあると思います。今後どうやってバリアフリー支援の質を確保していくか、という点は十分に考えて議論される必要があると思います。

#### 【後輩へのアドバイスなど】

**司会**…では次に、これから大学、大学院への入学を考えて

いる障害のある学生へアドバイスがありましたらお願いします。

**Bさん**…そうですね、障害があると、いろいろなことが効率的にできないという問題はあと思うんです。入学してから、進路選びとか職探しとか、障害があることで効率的にできないことが出てくるかもしれません、じゃあ早いうちから、将来の進路を決めて、それに対して合理的な手段をどんどん取っていかないと、というように緊張すると、それは楽しくない。

楽しくないですし、例えば高校時代にもう先々のことまで決めてしまうと、後で得た知識によって新しい道が開けるといことがなくなってしまうと思うので、障害があるかないかに関わりなく、実際にはなかなかそうはいかないのですけれども、気楽に大学に入学して、いろいろ試してみればいいのではと思います。

**司会**…障害のある学生が大学進学を断念してしまう要因について、何かご意見はありますか。

**Bさん**…障害があると「とりあえず鍼灸の資格を取りなさい」というような、固定した進路がある場合があるかもしれないですね。

そういった場合には、なぜあなたは大学に行くのですかと質問を受けるわけです。健常者は障害者に比べて進学校

に入りやすいのですが、ここでは、なぜ社会に出ようと思っただのかと質問されることの方が多い。問題にされる方向性が多分逆なんですね。

だから障害学生は、「まず手に職」思考があって、大学に進学するには、より強い動機づけを必要とするということもあるかもしれません。

僕の周りは大学に入るのが普通という環境だったので、周りが行くから何となく来たという部分はあるんです。

ですから、そういう環境が大学に進学する障害学生の数とかに影響を与えている可能性はあると思います。

**司会**…障害がある高校生への大学側からの情報発信については、どう思われますか。

**Bさん**…東大は必要な情報発信はしていると思うのですが、そもそも、障害学生が受験したことのある大学や、入学したことのある大学の裾野が狭過ぎるということはあると思います。受入拒否はしていませんが、「点字で受験したいんですけど」とか、「拡大文字で受験したいんですけど」と言った時に、一から説明して、例外として個別対応してもらおうという形になると、受験をしようとする際の障壁になるわけです。そういった学校の割合がまだまだ多いということなのかと思います。

**【これからの障害者支援】**  
**司会**…それでは最後に、これからの障害者支援について、ご意見をお聞かせください。

**Bさん**…そうですね、まず学生ですと、情報保障の分野では結構いろいろな役割が果たせるんじゃないかと思えます。情報保障には、一方で専門技術というのがありますけれど、むしろ学問の専門知識が生きてくる場面というのは多々あると思うんです。

点訳でも、文法があり、正解、不正解が一応あるわけです。それで専門技術の習得に流れがちなんですけれど、一方で専門書を読みこなせる知識が必要なんです。そうした時に、実はそういう知識を持っている学生というのは、それなりに役割を果たし得るんじゃないかと思えます。

大学における支援では、個々の大学で財政状況も違いますし、知識においても差があるわけですが、そういう個々の大学の状況に関わらず支援ができる体制を整えたいと思いますし、大学間での知識を共有するという面では、多くの大学に関わっている組織ができることというのは、大きいと思います。

**中津さん**…日本の大学における障害学生支援について望むことですが、各大学の情報やノウハウをまとめる機関が必要だと思っています。日本学生支援機構の学生支援情報デー

**■Cさんとの座談会**  
**〈勉強する後ろ盾があるんだなと〉**

**司会**…はじめに、バリアフリー支援室に支援を依頼した経緯を話していただけますか。

**Cさん**…自分の耳がちょっと聞こえが悪いということは、高校後半から自覚するようになっていました。大学に入った時に改めて精密検査をして、医師から多分英語のリスニングなどに影響があるだろうと言われて、支援をお願いしたわけです。

**司会**…そうしますと大学のセンター試験では、特別な措置

は依頼しなかったのですね。

**Cさん**…自分が難聴だとあまり気に留めていなくて。検査を受ける前でしたので、リスニングなども単に努力の問題かなと思っていて、あまり強く意識していませんでした。

**司会**…今は大教室での講義が多いと思うのですが、例えば座席を前の方にするなどの支援は受けていますか。

**Cさん**…努めて前の方に座るようにしていますし、大きな教室だとマイクがあって聞こえるので、支援はお願いしませんでした。

**司会**…体育の授業などは、いかがですか。

**Cさん**…あまり指示は聞こえないですね。いつも友達に確認しています。離れている場合はほとんど聞こえないので、いつも友達の前について分からない時はすぐ聞いています。

**司会**…これから専門的な科目が増えてくると思うのですが、それに対して新たな支援を依頼することは考えていますか。

**Cさん**…そうですね。僕が進むのは文学部ですが、マイクを使った講義はともかく、演習でみんながしゃべるような時は、聞き逃すことが多いかもしれないので、何かお願いするかもしれません。

**【支援室があって良かったことなど】**

**司会**…大学にバリアフリー支援室があることについて、メ

リットや効果を感じることはありませんか。

**Cさん**…これまで、リスニングの時はスピーカーが一番近いところに席を固定してもらったり、リスニングテストの時は別室で受けたりという支援を受けてきて、他のいろいろな障害のある人の存在も知ったりしました。それから僕の障害は軽度なので、支援に値するのかなと考えていたのですけれども、そういうことも含めて相談に乗ってくれたりして、心強かったです。東大にいて勉強する後ろ盾があるんだと感じるんですね。

**中津さん**…大変うれしい、頑張ります(笑)。

**司会**…では、支援室への希望とかは何かありますか。

**Cさん**…本郷支所は設立されてまだ二年目ですよ。知られてない部分もあるようです。今日、本郷キャンパスに来て、「バリアフリー支援室どこですか?」と聞いたのですが、ご存知なかったみたいでした(笑)。

**中津さん**…本当?

**Cさん**…関係がある学生でしたら知っていると思いますが、関係のない学生は興味もないだろうし、あったとしても知る機会がないのかなと思います。もっと広く存在を知ってもらえたら、支援の可能性も広がるんじゃないかと考えています。

駒場では、大きな教室だと席を指定するステッカーが必

ず二つ三つぐらいあるのですが、普段バリアフリー支援室を感じるものはそれくらいで、そう目立ってはいません。

例えば一般学生がああいうステッカーを見た時、意味は分かっていると思うのですが、それがバリアフリー支援室の「支援の一環」だと知っているかという点、多分違うと思います。

**司会**…本郷キャンパスでは、バリアフリー支援室の紹介をしていますか。

**中津さん**…そうですね、駒場では新入生ガイダンスの時にバリアフリー支援室の紹介と説明をしています。本郷では、障害学生が在籍している学部の人には障害のことやバリアフリー支援室のことを知っていても、障害学生が在籍していない学部は、支援室どころか障害というものに目を向ける機会が少ないかもしれませんね。

**司会**…全国の大学でもまだ、高校に対する障害学生の受け入れや受験の際の支援などの情報発信が少ないようですが。  
**Cさん**…高校の時に大学でのバリアフリーに関する情報とかがもっと得られれば、もっと進学率が上がると思います。入試の時点からいろいろな支援があるということを通して、知る人もいるかもしれませんし。

**【後輩へのアドバイスなど】**

**司会**…これから大学への入学を考えている障害のある学生へのアドバイスがありましたらお願いします。

**Cさん**…僕みたいに軽度で、まだ自覚していないという人が多分いると思いますが、そういう人は、早いうちから自分の状況と抱えている問題を見極めて、できること、できないことを知る必要があると思います。

例えば僕の場合、リスニングの習得に人よりも時間がかかるということが分かったのが大学の時点でした。もし早いうちから自覚していれば、高校の時から対策も立てられ、大学に入った時ももっと早く必要な支援を頼むこともできたと思うので。

軽度の人も重度の人も同じだと思うのですが、早いうちから自分でできること、できないことを見極めるのが、大学に入る上ですごくいい準備になるんじゃないかと思っています。  
**司会**…高校に相談できるような何らかの体制も必要でしょうか。

**Cさん**…もしそういう体制があれば、自分が実際にはどういう状況にあるのかという把握もできたんじゃないかと思っています。

僕は高校で精密検査を行った記憶がないので、もし精密検査をして、その結果を例えば担任の先生が把握して、ど

ういう問題があるかということを相談できれば、もっと早く自覚できたんじゃないかと思っています。

**司会**…障害のある学生が大学進学を断念してしまう要因について、何かご意見はありますか。

**Cさん**…高校が進学校でしたので、僕自身も特に理由もありません。いま大学に進学したというのが大きいんです。ただ進学校だと、大きな障害を抱えた人が入ってこないんですね。

だから高校に入る前の段階で考えてみると、大学から先の見通しが不安で、あまり大学のことを考えられないという面もあるんじゃないかと思います。

僕の場合、学校が坂の上にあつたので、例えば車椅子の人だったら通学しづらいだろうと思います。そういうふうな、障害のある子供達が進学校に入って大学を目指すという点で、考えます、まず高校でいろいろな苦労があるという点で、ためらってしまうんじゃないかと思うんですね。

実際、僕の高校はバリアフリーなどの配慮があまりなかったように思うので、進学校などの高校段階で、もっと障害のある人達に目を向けるべきなんじゃないかと思っています。そういうのが拡充されれば、高校の時から可能性がどんどん広がっていくし、それで大学に入ろうと考える人も増えてくるんじゃないのかなと。

**Dさん**…当初、ノートテイクのことをよく知らなくて、ほとんど何の知識もなくやり始めました。講議後の文字起こしも、最初は授業の内容を一字一句テープから起こす作業という事で、世の中にこんな仕事があるのかとちょっと驚きました。

**中津さん**…つくづく学生の力はすごいなと感じています。ノートテイクを例に取っても、学生ではなくてノートテイクを専門としている人達が本来行うべきだという意見も聞いたことがあります。Dさん達を見ていると、学生の力で十分やっていけるのではないかと実感しています。

**Dさん**…ノートテイクをしたのが法科大学院なのですが、専門用語や学者の名前など、知っている人じゃないとうまく変換ができないことがあります。僕は法学部生です。で、その点では学生が行った方が良かったと思います。**司会**…外部のノートテイクにお願いしたことはあったのでしょうか。

**中津さん**…最初はお願ひしていたのですが、学生の中で支援を希望してくれる人が増えて、学生だけで対応できています。

必ずしも学内ということではないと思いますが、学生同士で支援を行っているというのは理解が進むなど、外部にお願いするのと違った良さがあると思っています。

#### 【これからの障害者支援】

**司会**…最後に、これからの障害者支援について、ご意見を聞かせください。

**Cさん**…例えばボランティア・サークルに入るとか、そういったことだけが支援ではないし、もっと小さなことでもいいと思うんです。

一つ例を上げると、今、駒場キャンパスで、サークルの看板が通路いっぱい並んでいます。看板の配置が毎日変わるの、視覚障害者は歩くのが不安だそうです。看板一つ立てる上でもそういった点を配慮できるようにすれば、それだけで十分、支援になるんじゃないかと思っています。

バリアフリー支援室の説明をする時に、日常でできることを具体的に説明する時間も設けたら、そんな簡単なことでもないのかと、みんなが考えるようになるかもしれない。そういうことを支援室で実践していけばもっと支援が広がるんじゃないかと思っています。

#### ■Dさんとの座談会

～大変得るものも大きい、いい仕事～

#### 【学生による支援】

**司会**…支援を通しての感想をお聞かせください。

学生が、改善するための意見もいろいろと挙げてくれたので、こちらもその意見を受けて体制を改善して行きました。今の支援体制があるのは決してスタッフの力のみではなく、学生も巻き込んで一緒に作り上げたところがある。非常に大きいと実感しています。

**司会**…支援学生の募集はどのように行っているのですか。  
**中津さん**…学内の掲示板への掲示とインターネット上での募集、あとは口コミで広がったところも大きいです。最終的には五〇数名近くになりました。

**Dさん**…最後の方はほとんど学生間の口コミでした。ね。  
**司会**…PC（パソコン）テイク（パソコンで入力・表示するノートテイク）については、スキルアップのための研修もあるのでしょうか。

**Dさん**…実は本格的な研修はまだありませんが、ノートテイクは相当高度なテクニックが要求されますので、その都度、入力練習をしていましたね。

**中津さん**…募集する際は、最初に面接を行い、実際に授業を想定した一〇分程度のテープを流して、それを聞きながら学生が入力していくテストを行います。十分な技術があると判断した時点でノートテイクになってもらいます。入力技術がもう少しだという学生には文字起こし担当に。本人の希望もありますが、振り分けはこちらで行っていま

す。  
 司会…支援学生の確保のご苦労などありましたか。  
 中津さん…最初は大変でしたね。人が全く集まらなかった  
 ので(笑)。最終的には学生だけで対応できるようになり  
 ました。

今後、支援学生が卒業することも考えておかなければい  
 けないので、横の連携をさらに深めるということも意識し  
 ています。それを深めることによって、思わぬものが生ま  
 れたりすることの一つが『バリバリ白書』(支援室に集ま  
 る学生が発行するニュースレター)です。学内や外部への  
 発信源の一つだと思っています。

Dさん…支援を通じて、僕もバリアフリー支援室に所属し  
 ているような意識がだんだん生まれてきて、ほとんどスタッ  
 フのような存在になってしまいました。

中津さん…支援室の一番の業務の目的は、障害のある学生  
 と障害のない学生の学習環境を平等に整えることだと思  
 うのですけれども、それ以外にも、例えば支援室を居心地  
 のいい場所にするように心掛けるということはやっていま  
 すね。

司会…ノートタイカールのマニュアルなどをDさんをはじめ、  
 学生が中心となって作られているとお聞きしましたが。

Dさん…マニュアルなどを自主的に作って、知識やノウハ

Dさん…今までは、手話や点字などもあまり知る機会がな  
 かったのですが、こちらに来てから教えて頂いたりしたの  
 で、理解が深まりました。

中津さん…教育的効果については、特に意識していません。  
 支援をする事によって、どう感じたかは人それぞれだと思  
 うんですね。

もともと障害に興味があってノートテイクをやってみた、  
 人の役に立って嬉しいと感じた人もいれば、Dさんのよう  
 に、最初はよく分からなかったけれども、実際に支援をし  
 てみたら障害者に対する理解が深まったという人もいるし、  
 自分はただ対価に見合う仕事をしただけだという感想もあ  
 る。それは全て正解だと思いません。

でも、支援をすることによって障害者理解が深まってき  
 たということは非常に嬉しいと思っています。

Dさん…人はいろいろだなということは分かりましたね。  
 障害のある学生にもいろいろな人がいる、当たり前ですけ  
 れども、自然に受け入れられる感じを覚えられました。全然違  
 和感がないというか、一緒にいても障害があることが特別  
 なことじゃないという感じになりました。

司会…現在、Dさんは四年生ですが、今後の支援学生につ  
 て、どう考えますか。

Dさん…今のところ下級生はいないですね。今の四年生が

ウなどを共有するということはありません。

司会…その際には中津さんも参加していましたか。  
 中津さん…学生主体ですね。それを見てこちらが「もう少  
 しこうした方がいいんじゃない？」と話をしてもまた作って  
 いくという感じです。

Dさん…学生に任せてくれたのですごくやりやすかったと  
 いうのはありますね。上から命令されるのではなく、自主  
 的に主体的に取り組むことができました。

#### 【支援活動を通して】

司会…Dさんから見て、支援室に対して、何か望むことは  
 ありますか。

Dさん…そうですね。本郷キャンパスは専門学部なので、  
 横のつながりというのがあまりないので、ここに来ること  
 でいろいろ仲間意識を持てたりもします。

司会…障害学生がいる学部とない学部では、その辺の温  
 度差があるのでしょうか。

Dさん…ここに来るまで障害学生の知り合いは一人もいな  
 かったのですが、来てからは一〇人位になり、知り合いが  
 増えました。それで障害のある人のことがだんだん分か  
 り始めて、すごくいい経験になりました。

司会…支援による教育的な効果はいかがでしょうか。

中心にずっとやっていたので、卒業するとどうなるのかと  
 いうのはちょっと心配ではありますね。

中津さん…ノートタイカー業務に対して支援室への要望な  
 どはありますか。

Dさん…あまりないですが、仕事がちょっと不定期なので、  
 継続してやれるような仕事があれば、ぜひやりたいと思っ  
 ています。すごく何かやりたいのに仕事がない時は、結構  
 つらいかな。

#### 【後輩へのメッセージ】

司会…まだ支援をしたことない学生に対してメッセージが  
 あればお話しください。

Dさん…そうですね。大変得るものも大きい、いい仕事な  
 ので、気軽にやっていたらいいと思います。希望する  
 時間にできて働きやすいので、なんでやらないのかなと思  
 います。すごくいい仕事なのでやってみてほしいですね。

#### 【これからの障害者支援】

司会…最後に、支援学生に対して、またこれからの障害者  
 支援について、ご意見をお聞かせください。

中津さん…支援学生が社会に出た後、障害のある人と出会っ  
 た時にぜひバリアフリー支援室で学んだこと、体験したこ



とを思い出してほしいなと思います。

Dさん…そうですね。そういう人にこれから出会ったとしても、あまり構えることはなくなるんじゃないかとは思いますが、そうですね。

中津さん…障害について様々なことを経験していった人達が社会に出て、それをどういふふうに生かしてくれるのか楽しみですね。

Dさん…学ぶことは大きくて、ここに所属していなかったら今の僕はなかったんじゃないかなと思うくらい、いい経験ができました。

中津さん…これから障害学生支援を始めようとする大学などで支援をご担当される方には、ぜひ「バランス感覚」を持ってやっていただけたらと思います。障害のある学生と障害のない学生の学習環境が平等に整えられるように支援を行う。障害のある学生に不利益が生じないように支援するということはもちろんですが、支援をすることで障害のない学生の不利益を生んでいないかどうかにも心がけるなど、「バランス感覚」を持って支援にあたって頂ければと思います。

また、これは私にとっての課題でもあります。